The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	問の構造について
Author(s)	入江, 幸男
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1986, 20, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12694
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

問の構造について

入江幸男

もし認識が問に対する答えとして与えられるとするならば、我々は理論的態度を研究するときに問の研究からはいることが出来るだろう。また、我々の生活の大きな部分が技術的問題、実務的問題、倫理的問題などの処理に費やされているとするならば、実践的態度を研究するときにも問の研究からはいることが出来るのではないか。そしてまた、問は理論と実践を媒介している場合もある。この様な関心から小論では問の研究の一前梯として、問の構造についての暫定的な考察を試みたい。ここで扱うのは議論の便宜上、言語化された問を主にした問題成態の意味構成とも言うべきものであって、問の発生過程、問の発達過程、問の解決、問の取消、問の問いかえし（再構成、破壊）等の問題も同様に根源的な問題であるがここでは論じられない。また問題成態と言っても個人が問う問題を主として想定しており、いわゆる国際問題、社会問題などの存立構成はここではまだ射程の外にある。

問の構造の分析については既にハイデッガーと三木清による研究がある。(1) ハイデッガーは『存在と時間』の第二節に於て問の形式的構造の契機として〈問われるもの〉(Gefragtes) と〈問い合わされるもの〉(Befragtes) と〈問い求められるもの〉(Erfragtes) を挙げている。彼によれば、例えば、「存在の意味とは何か」という問では、

存在が〈問われるもの〉、存在者が〈問い合わされるもの〉、存在の意味が〈問い求められるもの〉である。また三木清は、ハイデッガーの影響を受けていると思われる論文「問の構造」(1926) において、問の必然的三契機として「問はれたもの」「問はれたこと」「問の観点」を挙げている。彼によると、例えば、「歴史は客観性を有するか」という問にあっては、歴史が「問はれたもの」、客観性に関わるかぎりに於ける歴史が「問はれたこと」、客観性が「問の観点」である。以下の分析ではハイデッガーと三木清による問の分析を参考にしながら、問の構造契機を大きく〈問われること〉〈問う者〉〈問い合わされるもの〉に分けそれぞれについて考察してゆきたい。

一　〈問われること〉の三契機

〈問われること〉を文で表現したものが、疑問文である。普通、平叙文の意味を命題というのにならって、疑問文の意味を問題と呼んでも良いだろう。但し、言語によって分節化されていない〈問われること〉もある。例えば、感覚運動的知能の段階や前述語的了解での問に際して。「問」という言葉は狭い意味ではここにいう〈問われること〉を表しているが、広い意味では「問うこと」をも含んでいる。ちなみに題目での「問」は広い意味である。

〈問われること〉に注意すると、そこに先ず二つの構造契機を見いだしうる。我々が問うとき、我々の注意はある対象に向かっている。このことが、問う行為の始まりである。次に我々の注意は、その対象の中で、問い求めることを明らかにする。〈問われること〉の中には、〈注意が向けられる対象〉と〈その対象に於て明らかにされる事柄〉という二契機がある。この前者を〈問われるもの〉、後者を〈問い求められること〉と呼ぶことにする。

＜問われること＞のこの二契機は、了解、解釈における「……を……として了解、解釈する」という＜として＞構造、ないし二肢構造に対応している。この対応関係は、了解や解釈が、一定の問いに対する答えであるということに由来しているのではないか。

＜問われること＞にはもう一つ重要な契機がある。＜問われるもの＞に於て、注意を＜問い求められること＞へと導くのが＜問の観点＞である。例えば、サファイアの色を問うとき、サファイアが＜問われるもの＞であり、色が＜問の観点＞である。＜問い求められること＞は、いわば欠如、空所、無として構造契機となっているのであって、この欠如、空所、無という否定性が、問を問たらしめているのであり、問を発動させるのではないか。

広松渉教授は、「判断成態の意味構造」を分析して、「sはpなり」という判断は「sは○○性に即してpなり」という意味構成を持つことを明らかにしておられる。(2) 例えば、「この花は赤い」は「この花は色彩性に即して赤なり」という意味構成を持つ。判断のこの意味構成は、＜問われること＞の三契機と対応関係を持つのではなかろうか。「sは何か」という問に「sはpなり」と答えるとき、sが＜問われるもの＞であり、「○○性」が＜問の観点＞であり、pが＜問い求められること＞に対応している。＜問い求められること＞と＜問の観点＞の論理的関係は、判断におけるpと○○性の関係と同じく、いわゆる種と類、特殊と普遍の関係である。

次に、＜問われること＞の三契機をより詳しく規定するために問を二つに分けて考察しよう。＜問われること＞が言葉で表現されたものが疑問文である。疑問文はドイツ語文法では決定疑問（Entscheidungsfrage）と補足疑問（Ergänzungsfrage）に分けられる。前者は「はい」「いいえ」で答える問であり、後者は疑問詞で始まる問である。他の大抵の言語でも疑問文をこのように区別することができるのではなかろうか。これを用いて問を決定疑問

と補足疑問にわけることができる。(3)

a　決定疑問の三契機

決定疑問を一般的に「sはpであるか」と定式化できるだろう。このとき決定疑問の三契機は何になるのか。〈問われるもの〉はsである。〈問の観点〉は、今仮に「sは○○性に関してpである」とするならば、○○性であろう。〈問い求められること〉は「sはpである（或はpでない）」である。

これに対して「sはpであるか」は「『sはpである』という言明は真か」を問うていると解すると、〈問われるもの〉は「sはpである」という言明であり、〈問の観点〉はその言明の真理性であり、〈問い求められること〉は「『sはpである』という言明は真である（或は偽である）」であることになるが、この問に答えるには「sはpであるか」に答えておかなければならない。「『sはpである』という言明は真か」の問における〈問い合わされるもの〉は「sはpであるか」という問の答えである。ゆえに、この二つの問は区別されるべきであって、「sはpであるか」の三契機は初めに述べたものの方でなければならない。

b　補足疑問の三契機

補足疑問を一般的に定式化できるだろうか。このためにまず疑問詞を二つに分けてみよう。

一　何、何故（どうして）、如何にして（どうして、どうやって、どんなふうに）

二　どれ（誰、どちら）、どのくらい（どれだけ、何枚、何グラム、等）、どこ（どちら、何丁目、何番地、等）、いつ（何時、何分、等）

一の疑問詞をつかう問では、選択肢が与えられていない場合が多いが、二の疑問詞をつかう問では、常に選択肢

が与えられている。例えば、普通は「あなたは何の花が好きですか」という尋ね方をするが、花屋さんの前では「あなたはどの花が好きですか」という尋ね方をするだろう。それは選択肢が目の前に与えられているからである。もしそこで「あなたは何の花が好きですか」と尋ねられたならば、我々はその問に答えるとき、目の前の花の中から選ばなくてもよいのだと感じる。更に一の疑問詞をつかった問で選択肢が与えられている場合には、その問を二の疑問詞をつかって言い直すことができる。例えば、レストランでメニューを見て同伴者に「何にしようか」と問う時には、選択肢が与えられているので「どれにしようか」と言うことも出来るだろう。

一の疑問詞をつかった問は「sは何か」と一般化できる。「何故……か」の問は「……の理由（原因、根拠）は何か」という問に、「如何にして……か」の問は「……の仕方は何か」という問に言い直すことができるだろう。このように定式化できる問を規定疑問と呼ぶことにしてはどうだろうか。

二の疑問詞をつかった問は「sはどれか」と一般化できる。「……はどのくらいか」という問を「……の量はどのくらいか」、「……はどこか」という問を「……の場所はどこか」、「……はいつか」という問を「……の時間はいつか」と言い直すことができるだろう。「量はどのくらいか」と問うのは、考えられる量の値の範囲の中から「……の量の値はどれか」を問うのではないか。「場所はどこか」と問うのは、「……の空間上の位置はどれか」を問い、「時間はいつか」と問うのは、「……の時間上の位置はどれか」を問うのではないか。このように定式化できる問を選択疑問と呼ぶことにしてはどうだろうか。

このような補足疑問の三契機は次のようになる。

疑問文　〈問われるもの〉　〈問の観点〉　〈問い求められること〉

sは何か	s	本質、規定性	sの本質、規定性
sは何故か	s	原因、理由、根拠	sの原因、理由、根拠
sは如何にしてか	s	仕方、方法、様態	sの仕方、方法、様態
sはどれか	s	（必然性？）	（sの必然性？）
sはどのくらいか	s	量	sの量
sはどこか	s	場所（空間上の位置）	sの場所（空間上の位置）
sはいつか	s	時刻（時間上の位置）	sの時刻（時間上の位置）

先に〈問い求められること〉と〈問の観点〉が種と類の関係にあると述べたが、補足疑問の〈問の観点〉は我々にカテゴリーを想起させる。カントのようにカテゴリーの表を判断表から作ることが出来るとすれば、判断は問の答えと考えて、もっと完全な問の表からカテゴリー表を作ることを試みる価値はあろう。偶然目にしたライムンドゥス・ルルスの『新論理学』ではアリストテレスの十のカテゴリーを問の諸形態に対応させて考えている。(4) 但しそれはカテゴリーの区別に関しても問の諸形態の区別に関してもまだ不十分である。

〈問の観点〉がカテゴリーに比せられるとすれば、〈問の観点〉が〈問われるもの〉にふさわしくない場合があるだろう。三木清が「もし観点の選び方にして誤っているならば、……この問は無意味なるものとなるであろう」(5) と述べているのにならって、我々もかかる問を無意味な問と呼ぶことにしよう。「精神は何色か」というような問がそれである。これに対して我々は「精神は何色でもない。精神は色をもたない」と応えるであろう。ところで、「精神は青いか」という問に対しては我々は「精神は青くない」と答える。つまり、決定疑問の場合には〈問の観

点〉がふさわしくなくとも、まっとうに答えることが出来る。〈問の観点〉が〈問われるもの〉にふさわしくない場合に問が無意味になるのは補足疑問の場合に限られている。この原因は、補足疑問では〈問の観点〉が明示されているのに対して、決定疑問では〈問の観点〉が明示されていないことにある。決定疑問では〈問の観点〉が明示されていないから、〈問の観点〉を適当にずらせることによって常にまっとうに答えることが可能になるのである。「精神は青いか」という問の〈問の観点〉は「色」であるように思えるが、「精神は青くない」と答えるとき、我々は精神が青いという色を持たないことのみならず、およそ色を持たないということをも考えている。(6) つまりここでは〈問の観点〉は「色」ではなく、「(精神の) 存在様態」へずらされているのである。決定疑問では最初に想定される〈問の観点〉も潜在的に共に問われていると言えるだろう。「sはpか」という決定疑問は、sとpを結合する記号論で謂うところのシンタクスへの問であり、補足疑問は与えられたシンタクスにおける空所に何(どれ)が入るかというパラダイムを問う問であると言えないだろうか。

二　〈問う者〉

〈問う者〉は、ふつう人間であり個人である。(個人が問を立てたり問を解こうとする際に、本当に〈主体〉たり得ているかどうかについては別に吟味してみなければならないが、ここでは個人が問うているという現象の表面的な考察に留まらざるを得ない) 人が問うのは、ふつうなんらかの問う必要があるからであろう。対象、状況とこうした関係を持つのは、ひとが一定の目的を持つからである。例えば、玄関の鍵を探すのは、会社に行くためであったり、会社で人間関係に悩むのは、出世のためであったりする。そのとき、会社に行くのを止めれば、玄関の鍵

を探す必要はなくなり、出世を諦めれば、人間関係の悩みもなくなるかもしれない。いずれにしろ〈問う者〉は答えの獲得を目的としてはいるが、その目的を手段とするより高い目的を持っている。従って、〈問う者〉は、〈目的を持つものとして問を立てる者〉である。

目的と問は、目的と手段の関係にある。ある事柄が複数の目的の手段となり得るように、ある問が複数の目的のために立てられることが可能であろう。従って、問を解こうとすることは、常にある目的のためではあるけれども、どんな目的であるかには関係なく可能なのである。

ところで問というのは、自分で自分に問うという自問としてのみならず、他者への問いかけや、他者に問いかけられることとして存在することもある。問うことの二段階、問を立てることと、問を解こうとすることがある程度独立していることは、他者に問いかけたり、問いかけられたりする場合に、一層明らかになる。AがBに問いかけるとき、Aは問を立て、Bは問を解こうとしているといえる。Aがある生活の必要から問を立て、これを解こうとしたが解けず、Bに問うたとしよう。Bはその問をAの信頼に応えるという目的を持って自分に立て、これを解こうとするとき、AとBは同じ問を解こうとしていても別の目的を持って問を立てている。この場合、同じ問を立てても、全く異なる目的を持って問を立てており、しかもBの目的は解こうとしている問とは全く内在的関係がない。従って問を解こうとすることは、常にある目的のためであるが、どんな目的であるかには関係無く可能であり、しかもその目的は問と全く内在的関係がないものでもよいことが解る。

この様に目的を持って問を立てることと、問を解くことが独立していることから次のことが結果する。

一、様々の目的で様々の人が同一の問を解き得る。

二、他者に問い合わせることが出来る。a、解らないときに他者に問い合わせることが出来る。b、自分で解ける時でも他者に代理で解いてもらうことが出来る。c、教育のために、問を与えて解く練習をさせることが出来る。d、遊び、ゲームとして、問を与えて解かせることが出来る。等など。

三、知識の伝達が容易になる。メッセージは常にメタメッセージをともなっており、このメタメッセージはメッセージがどんな文脈に於て与えられているのかに付いてのメッセージである。与えられた平叙文を一義的に理解することは、このメタメッセージを理解することによってのみ可能である。このメタメッセージは、メッセージが如何なる問に対する答えであるかについてのメッセージであるといえるとするならば、与えられた平叙文を一義的に理解することは、それが如何なる問の答えであるかを理解することによってのみ可能であることになる。(7) ここでもしある目的を持って問を立てることと問を解くことが独立していなければ、問を理解するにはその問の目的をも理解しなければならないだろう。一つの問は多くの目的のために立てられることが可能であるので、問の理解はかなり難しいものになるだろう。そうするとメッセージが如何なる問の答えであるかの理解もかなり複雑な作業になる。また、もし問を立てることと問を解くことが独立しておらず、且つ目的の理解がメッセージの理解と同じくメタメッセージの理解を必要とするならば、この理解は無限遡行に陥り、最初に与えられた平叙文の理解は不可能になる。

ちなみに、一つの平叙文は複数の問の答えと成り得、更にその各々の問は複数の目的によって立てられ得る。

この二と三によってコミュニケーションが可能になる。コミュニケーションの成立は、他者の立場に立てるとい

うこと、つまり自分の個人的状況を越えてより普遍的な立場に立てるということを条件としている。この条件もまた先の独立性と関係している。問を立てることと問を解こうとすることの独立性ゆえに、問を解こうとすることは次の意味で普遍性を持つことになる。

一、得られた答えが、様々の目的で同じ問を立てた多くの他の人に役立つ、つまり普遍的な妥当性を持つ。

二、問を解く作業は、一定の目的を持つことから解放されている。一定の目的を持つということは、一定の状況の中にいるということである。故に問を解こうとすることは、一定の状況を超越していることになる。この故に、得られた答えが普遍妥当性をもち得るのであろう。

〈問う者〉は、〈個別者として問を立て、普遍者として問を解こうとする〉と言えないだろうか。別言すれば、〈状況内存在者として問を立て、状況超越者として問を解こうとする〉のではないか。〈問う者〉のこの二重性を経験的意識と超越論的意識などの言葉で表現される意識の二重性に関係づけて考察することが出来るだろう。

〈問を解こうとする者〉は、状況、目的を超越しているつまり問の必要性を超越している。それ故に他方では、答えの得られない可能性を意識することが可能になり、答えの得られないことを常に無意識にでも覚悟しているといえるのではないか。〈問う者〉が向かっている欠如、空所、無は、状況からの解放の希望と閉塞の絶望との間の揺れ、めまい、不安である。人は常に何かを問うている故に常に不安である。

三　〈問い合わされるもの〉

問の構造契機として〈問われること〉と〈問う者〉を一瞥してきた。問を立てるには、これで十分かもしれない

が、問を解こうとすると、何かに問い合わせねばならない。ここに第三の構造契機〈問い合わされるもの〉が必要になる。例えば、言葉の意味を調べるときの辞書、電話番号を調べるときの電話帳、重さを調べるときの秤、道順を訪ねるときのタバコ屋さん、法律で困ったときの弁護士、等である。

様々の〈問い合わされるもの〉を我々は次のように整理することが出来るだろう。

一、他者。他者に問い合わせるとは、他の〈問い合わされるもの〉の場合と違って、他者にその問を解いてもらうことである。他者がその問を解こうとすれば何かに問い合わせねばならない（再び他者に問い合わすかもしれないが）。それ故に、問は最終的には他者以外のものに問い合わされねばならない（但し、他者の意向を問う問についてはこの限りではない）。

二、他者以外のもの。これは次のように区別されるだろう。

a、〈問われること〉についての〈問う者〉の知識

b、〈問われること〉についての情報を載せた本等の情報媒体

c、〈問われること〉についての調査、観察、実験

この中で、bを作るにはaとcに問い合わせねばならない。従って、問が最終的に問い合わせるものはaとcである。

aやcに問い合わせる場合を論理的に考えるならば、〈問い合わされるもの〉から答えを引き出す過程は、三段論法として捉え得るだろう。いま、答え「sはpである」が定言三段論法によって得られたとすると、〈問い合わされるもの〉は「sはpである」を結論とする三段論法の中概念であり、sは小概念、pは大概念になる。「sは

pである」という答えが、仮言三段論法や選言三段論法によって導かれる場合には、媒介になっているのは概念ではなく一つの判断であって、この判断ないしこの判断の述べている事柄が〈問い合わされるもの〉である。ちなみに、〈問い合わされるもの〉によって答えが得られるだけでなく、〈問い合わされるもの〉は得られた答えの吟味の尺度にもなる。

この〈問い合わされるもの〉を我々はどのようにして求めるのであろうか。ある問を立てることは、常に一定の理論的諸前提に基づいている。この理論的諸前提を〈問の地平〉[8]と名付けよう。すると〈問われるもの〉も〈問いの観点〉も、そして多分〈問い求められること〉もこの〈問の地平〉の中にある。もし〈問い求められること〉がこの〈問の地平〉の中になければ、その問は解けないだろう。〈問い合わされるもの〉はこの〈問の地平〉の中で〈問われるもの〉と〈問の観点〉に導かれて規定される。従って、〈問い合わされるもの〉は広い意味ではこの〈問の地平〉であると言うこともできよう。あまり適切な例ではないが、例えば「この新生児は何グラムか」を問うときに、〈問い合わされるもの〉を規定するのは、〈問の観点〉である。重さを計るのに、定規を持ってきてもしかたない。〈問い合わされるもの〉を更に規定するのは〈問われるもの〉である。新生児の重さを計るのに大人用の体重計を使うことは出来ない。

ハイデッガーによれば、解釈はそのつどなんらかの先持（Vorhade 先に持つこと）に基づいており、この先持されているものをどういう着眼点から解釈すべきかを確定するある見通しの導き、すなわち先視（Vorsicht 先に視ること）を必要とし、また解釈はいつも既に特定の概念構造の採用に態度を決めている、即ち解釈は先取（Vorgriff 先に摑むこと）に基づいているということである。[9] もし、解釈がこの様なものであり、また解釈は常に（言語化さ

れていない問いを含めて）一定の問いの答えであるとするならば、先持されているのは〈問われるもの〉であり、先視されているのは〈問の観点〉であり、先取されているのは〈問の地平〉であると考えることが出来るのではないか。

ところで、問を解くことは最終的に問の必要性の充足、解消を目的とする。しかし、答えの最終的な吟味の尺度は、問の必要性つまり問の目的である、というわけではない。さもないと、様々の目的で立てられた一つの問に、最終的に〈問い合わされるもの〉が様々あることになり、問が目的と独立に解かれ得ることに矛盾する。前に述べた問題設定と問題解決の独立性の論理的根拠は、問を立てた目的を顧慮することなく〈問い合わされるもの〉を規定することが出来ることにある。

但し、一般に目的が手段の適切性の吟味の尺度になる様に、問の目的も問と答の適切性を吟味する尺度にはなる。勿論、答の適切性と答えの正しさは別のものである。問が適切であれば答えも適切であろう故に、答えの適切性を吟味することによって逆に問の適切性を吟味することが出来る。また、問が適切であるのに答えが適切でなければ、答えが正しくないことが解り、答えの吟味に役立てることが出来ることもあろう。

おわりに

以上の分析の中には勇足の発言もあるかもしれないし、多くの論点は、いくつかの観点から問の諸形態を分類して考察することによって、更に詳しく論じなければならないと思う。また、問題成態の分析といっても一つの問を取り上げて分析するだけではなく、一つの命題が他の命題との関係に於て捉えられねばならないように、一つの問

も他の問との関係に於て捉えられねばならないだろう。我々は自覚的及び無自覚的に前提している様々の知からなる体系（システム）の中で生活しているが、これと同じく自覚的及び無自覚的に採用している様々の問からなる体系（システム）の中で生活しているとも言えるのではないか。そして、そう捉えた方が現実の動態に一層近づくことが出来るのではないだろうか。

注

（1） M. Heidegger, *Sein und Zeit*, 12. Aufl, Tübingen, 1972, §2. 三木清著「問の構造」（『三木清全集』岩波書店、第三巻、一九八四年、所収）。

（2） 広松渉著『存在と意味』岩波書店、一九八二年。

（3） このように問を分ける試みは既に Friedrich Löw というひとによって行われている。Friedrich Löw, Logik der Frage, in „*Archiv für gesamte Psychologie*", Bd. 66, 1955, S. 401 ff.

（4） Raimundus Lullus, *Die neue Logik*, Hamburg, 1985, S. 24–39.

（5） 三木清著、前掲書、一六三頁。

（6） これは、ヘーゲルのいう無限判断である。問と無限判断の関係に付いては別の機会に論じたい。ヘーゲルの無限判断については拙論「ヘーゲル『精神現象学』における無限判断とエレメント」（『大阪工業大学紀要』人文社会篇、第二六巻、第一号、一九八一年、所収）を参照下されば幸いです。

（7） Vgl. Gadamer, *Wahrheit und Methode*, 4. Aufl., Tübingen, 1975, S. 357.

（8） 「問の地平」という概念は、ガダマーの Fragehorizont という概念の借用である。Vgl. Gadamer, *ibid.*, S. 352.

（9） Heidegger, *ibid.*, §32, S.150. 訳語は『存在と時間』細谷貞雄、亀井裕、船橋弘訳、理想社、一九六三年、を参照させて頂きました。

（文学部助手）